

じやりみち

… 被災地支援情報 …

第98号 発行日 2013. 6. 28
被災地NGO協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702
URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>
e-mail ngo@pure.ne.jp
口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

声なき声に耳を傾け、見えないものを観る！

東日本大震災から丸2年が過ぎ、マスコミの報道も少なくなり、ボランティアも減り、関心が薄れているように見えるが、実際被災者にとっては災害後の厳しい生活が続いている。仮設住宅の期限は4年に延長されたものの、復興住宅の建設や高台移転を含む住まいの再建は未だ目処の立っていない地域もある。一方、行政主導による復興計画には住民の姿は見えない。ある仮設住宅の区長さんは「自分たちの町は自分たちで作っていきたいと思っているのに、声を出せる場がない」とおっしゃっている。住民主体の復興という言葉を使うにはあまりにほど遠い状況だ。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、県外に避難を余儀なくされている人たちの中にはもう福島県に帰らないという人が4割もおられる。他方、関東圏から避難している人たちへの支援は未だほとんど手が付けられていない。「移動の権利・被ばくを受けない権利」は保障されるのであろうか？

そんな中で、被災地から届く足湯やまけないぞうの「つぶやき」を聴くと、一人ひとりに寄り添う支援の大切さが見えてくる。似田貝香門先生（東京大学名誉教授）もおっしゃっているが、つぶやきには被災者の苦しみ語られているケースが多い。例えば、「両親と娘、孫2人の5人亡くなってしまった。これも宿命かなと思っているが、わりきれない。」「1周忌や3周忌の手配やら、もう事務手続きや気を遣うことばかりで、泣く暇なくて。でも今もフラッシュバックが怖いね」というものだ。こういったつぶやきを受け止めるには、ボランティアが作り出す場の力、多彩な関係を通して、一人ひとりに寄り添いながら、目に見えないものを大切にし、声なき声に耳を傾けていかなければならない。

一方で被災地の復興のためには旧来のシステムから脱却しつつ多くの新しい制度や仕組みの導入も必要だろう。しかし、きめ細かく現場を見ていくと被災地のために導入された制度が逆に当事者の足を引っ張っているケースもある。例えば、被災地の仮設住宅には支援連絡員制度が導入されているが、実際に区長さんにお話を聞くと「支援連絡員制度が導入されてから集会所が使えなくなった」という現実も。これでは制度として不十分だろう。制度は全体を見回して作られるのであろうが、そこに当事者の本位が抜けおちている。災害復興制度研究所前所長の室崎益輝先生も特別講演の中で「制度とは一人ひとりの復興を支えるための社会インフラである」とおっしゃっている。制度から抜け落ちる人たちがいる事を必ず意識しなければならない。だからこそ、全体から個人を見るのではなく、個人から全体を見ることにこだわりたい。

足湯のつぶやきには、「たくさんの方が流れてゆくのを見たんだ。もうすぐ2年になるけれど、忘れられないよ。足湯はありがたい。こうして話を聞いてくれるのが嬉しい」、「次々といろいろな方が支援してくれて本当に助かった。またほんのちょっとした品物でも、そこに添えられた「一言」がとてもうれしく涙を流しながら何回も何回も読み直し大切にとってある」などがある。さらにこの足湯をきっかけに「今日初めてきました。仮設にいとストレスがたまるから仕事をしています。本当に気持ちが楽になりました、又きます。」「以前ボランティアに来てくれた人の住所を残している。あの時は頭を下げるだけで精一杯。今になってやっと、笑って話せるようになった。」などの前向きな気持ちになった人も少なくない。

この足湯に関わったボランティアは特に専門性をもった人たちではない。それでも、被災者のこころのひだにふれ、一瞬でも安らぎを感じてもらえることができる。だからこそ専門性や型にはまったボランティアではなく、また様々な領域へと越境していく「不領ボランティア」が必要なのだ。

こうして、当 NGO は阪神・淡路大震災以来、一人ひとりの声に耳を傾け最後の一人まで救うということにこだわってきた。ところで「寄り添い」は目に見えないものだ。「寄り添い」を実践し続けることで目に見える「つながり」が生まれる。この「寄り添いからつながりへ」の実践こそが被災地の復興のために、今必要なことだ。

やはりこの2年間基本方針に掲げた「人を救うのは人だ！」ということ大切にしたい。

【事業内容】

1. 寺子屋事業

2011年度「福島のための再生のために"フクシマ"と向き合おう！」シリーズ3回目、4回目の実施、peace 寺子屋「安保と原発」シリーズで4回の寺子屋を実施。福島への取り組みとして映画『禁じられた大地・フクシマ』上映会を開催した。

・寺子屋セミナー4回シリーズ（1回、2回は2011年度）

「福島のための再生のために"フクシマ"と向き合おう！」

第3回（4/7）「東日本大震災と私たち」

講師：神戸松蔭女子学院大学・池田清先生とゼミ生

第4回（4/27）「哀れな被災者のままではいけない」

講師：藤田浩志氏（ふじた農園 安子島米米生産倶楽部、野菜のソムリエ。福島県在住）

・peace 寺子屋4回シリーズ「安保と原発」

第1回（8/4）「命を脅かす二つの聖域を問う～安保と原発～」

講師：石田雄氏（ビデオメッセージ）+菊地原博氏

第2回（9/15）「脱原発を実現するために～安保と原発～」

詳細：第1回の振り返り

第3回（10/18）「脱原発を実現するために～安保と原発～パート3」 詳細：第1回の振り返り

第4回（12/20）「原発事故から一年9ヶ月県外被災者の悲痛な叫びを聞こう～県外被災者のいま～」

講師：江口紀子氏（関西 Future コミュニティ 代表）

森松あき子氏（福島からの県外避難者）

・寺子屋特別編

「東日本大震災支援活動報告～1万人のつづやき～」(4/6) 講師：頼政良太（被災地NGO協働センタースタッフ、東日本被災地担当、当NGOからROADに出向）

「阪神・淡路大震災をふり返って、今だから言える、あの時できたこと、できなかったこと」(5/31)

講師：中川和之氏（時事通信社山形支局長）

「『つづやき』から見えること見えないこと」(9/7)

講師：江口怜氏（ROADプロジェクトスタッフ）

映画『禁じられた大地・フクシマ』上映会（1/17、3/11）

2. まけないぞう事業

神戸に拠点を移し、月に1度遠野市に滞在しながら、岩手県を中心に「まけないぞう」事業を展開。作り手の人数は94人になり、3年目に入っても、手つかずの広大な被災地が広がり、被災者は先の見えない不安が深くなっている。

しかし、世間の関心は急速に減り、影響が「まけないぞう」事業の注文やタオル収集に確実に反映され、注文がストップし、タオルもぎりぎりの状態になっている。それでも被災地でのニーズはまだまだあるが、こちらとしても在庫を増やすわけにはいかず、生産を抑え、新しい作り手さんは保留のまま、現状維持を続けるのが精一杯な状況だ。それでも被災者は「まけないぞう」に心を寄せつつ、潤いのある生活を求め続けている。以下メッセージを紹介する。

幸い自宅付近はとても震災前の姿を思い出せないほどに、壊滅的な状態ですが、自宅を修理し、昨年10月より元の場所に住むことができます。しかし、あの日中学3年生の娘と1才の孫を連れ、車で避難するさい、津波にのみ込まれてしまいました。幸いにも一時は孫が海水を飲み込んでしまい、危うく守れなかったところでしたが、自分の出来る限りの努力で何とか水を全部吐き出すことができ、紙一重のところまで救えました。震災から1年8ヶ月を迎えても今だ風呂が大嫌いで毎日大泣きです。娘もストレスから原因不明の吐き気、呼吸困難が続き、回復するまで半年かかりました。いくら落ち着き始めましたが、近所でも数十人の人が犠牲になり、知人も少なくありません。親戚も今だ不明の人が多々います。

そんななか、知人から「まけないぞう」さんを紹介してもらい、楽しみに縫っています。

震災後色々な事が頭をめぐり、不眠症になり、薬を服用していますが、前を見て頑張る家族を守って行かなければと気を入れて頑張っています。文章を書くのが苦手な気が伝わったかわかりませんが、皆さんも風邪など引かずに気をつけて暮らしてくださいね。

PS: 外に出て働くのが怖くなり、自宅のできる仕事を望んで頑張っていますので、よろしくお願いします。(2012/11/30 宮城県石巻市 女性)

このように、被災者は精神的な拠り所として、「まけないぞう」を作り行っている。先行きの見えない被災地で、その苦痛を忘れさせ、不安を少しでも省くことに役割を果たした。

・実績：31,428 頭出荷（うちぞう・親子ぞう・リングぞうは 1,695 頭）

3. 災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

(A) 東日本大震災

当センターでは、震災から 2 年間様々な活動を展開してきた。震災当初から続けてきたまけないぞう事業については、遠野市の常駐体制から神戸からのサポート体制へと移行した。また、日本財団 ROAD プロジェクトへのスタッフの出向は、予算、事業規模縮小に伴い 0.5 人減となったが継続。宮崎 東北の野菜サポーター事業は限られた資金内で継続をしていたため、8 月を持って終了した。また、アレルギー対応粉ミルクを送るプロジェクトについても資金の範囲内で継続した。

* ROAD 出向スタッフの給料は JICA から受託されている株式会社地域計画連合からの再受託費用で賄った。

(B) 日本財団 ROAD プロジェクト

昨年度に引き続き、日本財団 ROAD プロジェクトにスタッフの頼政 1 名を出向させた。2012 年度も引き続き東京から足湯隊を送り出し、合計で約 1 万 6 千件のつぶやきを集め、東大被災地支援ネットや精神健康の専門家の協力のもと分析作業を行っている。また、その分析結果を検証する「つぶやき研究会」を開き、東京大学被災地支援ネット以外の専門家からも意見をもらってきた。その結果、足湯ボランティアが被災者への心の初期的なケアの一つとして大きな意味があることが分かってきた。特に臨床心理的なケアになっているということは様々な専門家からの視点でも認識されてきたことだ。

(C) KOBE 足湯隊の活動

当センターが事務局を務める「KOBE 足湯隊」は、主に能登半島(2007 年地震発生)・兵庫県佐用町(2009 年水害発生)・和歌山県那智勝浦(2011 年水害発生)など地震や水害の被災地に出かけてきた。同足湯ボランティアは、2010 年から神戸学院大学を初めとする「ボーアイ 4 大学連携事業」として、佐用町へ 15 人程度の大学生(神戸大学、神戸女子短期大学、神戸学院大学)が年に数回入った。

東日本大震災では、神戸大学ボランティアバスのメンバーが被災地での足湯ボランティアを継続して行ってきた。

(D) 佐用町での活動

佐用町での活動は、トヨタ財団からの助成事業が前年度で終了したのちも、「ボーアイ四大学連携事業」や山林整備活動を継続してきた。また、KOBE 足湯隊も足湯ボランティア活動を展開した。

(E) 平成 23 年度東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク

静岡県で開催している「東海地震などを想定した広域連携図上訓練」(2012 年度で 8 年目)のリーダー的役割として今年もワーキンググループから参画し、スタッフの頼政も若手リーダーとして準備段階から参画した。また、浜松出身の上野も 2 回目と参加なり、訓練の中で地元団体からの要請を受けて静岡の県内団体とうまく連携した支援の動きをすることが出来た。

(F) 震災がつなぐ全国ネットワーク

震災がつなぐ全国ネットワークは例年通り関わったが、スタッフの頼政が震つな若手幹事会メンバーとして次世代の若手として関わってきた。

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなげる支援活動

当センターは CODE 海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。2012 年度も東日本大震災への支援活動などで多大なご協力をいただいた。

4. 提言・ネットワーク事業

東日本大震災の支援活動として行ってきた、まけないぞうと足湯を通して、「心のケア」として大きな意味合いを持つということを提言してきた。具体的には、足湯から集めた「つぶやき」については、既にふれているが東京大学被災地支援ネットワークと協力し分析を行うことで、より明確に心のケアの意味づけがなされてきた。また、日本財団 ROAD プロジェクトが中心となり、「つぶやき研究会」を開いていく中で、足湯が初期的な心のケアの役割を大いに果たしているということが確認されてきた。

また、2012 年度で 8 回目を迎えた「東海地震に備えた図上訓練」での災害ボランティアネットワークが大きく注目を集めきた。同訓練では、災害時にボランティアと地域や行政、社会福祉協議会をつなぐ役割の「リエゾン」の重要性が再認識されてきた。東日本大震災では「リエゾン」が活躍したが、同時に動ける人材が不足しているということも指摘されてきた。静岡の図上訓練は、この「リエゾン」育成の場としても機能してきた。

5. 広報事業

会員間の連携と協働の充実を図るとともに、被災地内外の関係団体、支援者への情報発信を行った。

- ・ じゃりみち 2 回発行（1 回目約 800 部・約 2500 部）
- ・ HP の充実化については、活動レポートやニュースを即日ブログにアップすることにより、HP や Facebook をほぼ毎日更新してきた。

6. その他

(A) 脱原発ハンガーストライキ

昨年度に大飯原発が再稼働されたことを受けて、事務局内のミーティングにて脱原発ハンガーストライキを行うことを決定し、「原発が停止するまでやり遂げる覚悟」持って今日まで続けてきた。

～2013年度の被災地 NGO 協働センターの事業計画～

1. 寺子屋事業

「フクシマ」「原発」をテーマにした寺子屋を開催する。当事者の話を中心に、寄り添いながら個人から全体を見ていくことにこだわる。KOBEPiース i ネットやしみん基金 KOBETとも連携し「KOBET」から「フクシマ」を考えるテーマで開催する。全4回シリーズを予定。

第1回(6/14)

講師：佐藤健太さん(一般社団法人ふくしま会議理事)

その他、他のテーマに置いても可能な限り開催する予定。

2. まけないぞう事業

A)東日本大震災支援の継続

東日本大震災の発生直後から続け、作り手さんは94人程度。「災害時ボランティア経済圏」(*1)の中でまけないぞうの販売などを追求することも忘れないようにしたい。

*1 公共財の再配分、市場経済秩序における経済合理性による配分とは全く異にする、「市民社会内」の私的財産の、連帯、繋がり、「支え合い」、「わかちあい」という規範に導かれる経済行為によって、形成される経済圏(東京大学名誉教授似田貝香門)

B)広報・販促に関して

当事者の情報を丁寧に発信し、支援者と被災者をしっかりとつなげる。HPなどの刷新を行い、販売強化する。

C)その他

被災地ツアー：スタッフと同行するかたちで、数名単位で現場視察やボランティア活動を行う。呼びかけについては、ML、HP、Facebookなどを通じて行う。被災地への関心を持ってもらうと同時に販促にもつなげていく。

昨年に引き続き関心が薄れる中、販売も低迷し、タオルも思うように集まらなかった。残念ながら今年度は下方修正し3万個を目標とする。つばやきなどの被災者の生の言葉に向き合いながら、寄り添う。

D)CODEの事業の一つとして海外への発信

まけないぞうの海外発信・販売を検討する。

3. 災害救援事業

A)東日本大震災支援の継続

まけないぞう事業は神戸からのサポート体制を引き続き行う。また、福島などからの県外避難者の支援を継続する。ROADプロジェクトは、5月末に東京事務局を閉鎖。東京大学被災地支援ネットとの連携については継続する。

B)その他、災害発生時の対応

震災がつかなく全国ネットワークの若手グループの一員として災害救援を担う。あくまで、被災者に寄り添うということを大事にする。

C)KOBET足湯隊のサポート

KOBET足湯隊の事務局として引き続き神戸大学・神戸学院大学などの活動をサポートしていく。

D)南海トラフ巨大地震に対して

阪神・淡路大震災から18年間に築いてきたネットワークを活かし、素早い動き出しを意識。リエゾンとしての動きが出来るように日頃から意識をしておきたい。来るべき災害の減災の備えとして、西日本の平時の防災教室などにも積極的に関わる。

・寺子屋防災の開催

「南海トラフ・巨大災害」に備えるためアユス関西と連携し、関西にあるお寺を拠点にした寺子屋防災を進める。E)報告会の開催

神戸大学東北ボランティアバスのメンバー、不良ボランティアを集める会の尾澤さんと連携し、若者の視点から見た東日本を考える報告会を開催。(7月27日開催予定)

F)KITつながるプロジェクト

東京の大学生の集まり【KITつながるプロジェクト】による気仙沼スタディーツアーの引率

日本財団学生ボランティアセンターからの委託

・8月22日(金)～25日(日)

(下見は5月、6月、7月を予定)

4. 提言（アドボカシー）・ネットワーク事業

足湯ボランティア活動やまけないぞう活動から見える提言を行う。東北大を中心とした「臨床宗教師」でも足湯を取り入れる動きや足湯ボランティア論をまとめる動きも出てきており、やがて災害時における足湯ボランティアの役割が確立されていくだろう。一人ひとりに向き合うことが大切ということが本当に理解されるように発信していかなければならない。また、「福島原発事故子ども・被災者支援法」を具体化し実現させるために県外避難者と連携し行動する。

さらに震災がつなぐ全国ネットワークや東海地震等に備えた図上訓練の中で、組織の壁を超えたネットワーク作りが行われており、積極的に関わっていく。

そのほか、当 NGO の基本方針に合致すると思われる色々な活動や団体と連携、あるいは積極的に参画する。

5. 広報事業

A) 通信「じゃりみち」の発行

年 4 回

B) ホームページの充実

HP を活用する。

C) Facebook の利用

1 日 1 回の更新を目指す

D) メールニュースの配信

これまで通りメールニュースを配信する。

- ・ハンストニュース
- ・まけないぞうがつなぐ遠野物語
- ・ 東日本大震災関連（足湯関連）ニュース（週 1 回程度）

6. その他

A) 脱原発リレーハンストの継続

原発が再稼働しないという状況になるまで継続する。

B) 阪神淡路大震災 20 年行事

○2015 市民・NGO フォーラム（仮）

若者を中心に話し合いを行い企画を詰めていく

5 月 24 日 17:00 ~ 第 1 回準備会開催

ふくしまを忘れないために ~24時間リレーハンストから1年~

関西電力大飯原発再稼働に反対し、原発のない社会、原発に依存しない社会をめざして、全国1都2府

12県の仲間と24時間リレーハンストをはじめ、6月14日で丸1年を終えた。またハンストと同時に、当NGOでは寺子屋形式で原発についての学習会や映画会を重ねてきた。丁度1年目の先日14日には、福島県飯館村から「佐藤健太さん」を講師に招き、福島第一原発事故直後の飯館村の状況と2年後の状況、とにかく記録を残さねばという思いで提案した「健康生活手帳」、気の遠くなる除染の話、チェルノブイリで見たこと、「フクシマ連帯アピール」、若者を中心に今後考えていることなどを1時間半にわたって話して頂きました。

当初飯館村からいち早く脱出することを考えたにもかかわらず、福島にとどまることで被曝に対する不安など矛盾を内包しながらも、福島で何ができるのかを問い続け、そして福島未来についても熱く語っていただきました。



2013年6月14日

佐藤健太さんを講師に迎えて

peace 寺子屋を開催

私たちは脱原発を掲げているが、福島にの地元に残る人たちはそう思っている口には出せないという複雑な現実の中にいることを吐露された。県外の支援者の中には、「福島第一が今も何も収束しておらず、何か重大な事故があれば、また多くの人々が被曝することを考えると、今すぐにも福島から脱出しなければ・・・」と言う人も少なくないが、現実にはそれが出来ない人たちが多数いる。

こうした中で「原発事故・子ども被災者支援法」の具体化が進まず、特に県外避難者は経済的にも、精神的にも、もう限界である。「被曝を受けない権利、移動の権利、無条件の健康診断」などを盛り込んだ同法が具体化されることで、少しは救われるのだが現政権下では出口が見えない厳しい状況が立ちはだかる。

「フクシマ連帯アピール」には、「福島全ての被災者の速やかな再定住の保障」「安全な生活圏を保証する中での子供の権利の支持」を掲げているように、何の罪もない「無辜なる民」の暮らしを、そして自然を破壊された「ふくしま」を取り戻すためにも、いまは再定住という、いつ帰村できるのかの見通しがつかないなかでの、選択肢を取らざるを得ないというこの不条理な決断に対し、私たち支援者は一体何ができるのだろうか？

当事者でなければ分からないことがあることは言うまでもないが、足尾鉍毒事件や水俣病事件など過去の歴史に刻まれた被災民の営みと民衆の戦いにはきっと学ぶことはある。そしてとにかく私たちは、「ふくしまを忘れない」ということだけはできる。その一つが、ハンストを続けることであり、また学ぶことであると思う。

1年経って、「いま」大飯原発のみならず、すべての原発が廃炉になるまで、「24時間のリレーハンスト」を続けていくことを誓いたい。

(村井 雅清)

足湯の「つぶやき」から見てきたこと

東日本大震災の被災地支援活動として、当センターが加盟する「震災がつなぐ全国ネットワーク（以下、震つな）」と「東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会」、そして「日本財団」が協力し、日本財団 ROAD プロジェクトの一環（震災がつなぐ全国ネットワーク×日本財団 ROAD プロジェクト足湯事務局）として足湯ボランティアの派遣を行いました。主に東京のボランティアを中心として、延べ1,800人以上のボランティアが足湯に参加し、集めたつぶやきカードは16,000枚を超えました。

足湯ボランティアが集める「つぶやき」は、東京大学被災地支援ネットワーク（以下、東大被災地ネット）の先生方と共に分析を行ってきました。7月には分析や震つなの活動についての報告をまとめた報告書を発行する予定です。

この足湯ボランティア派遣事業は2012年度末を持って終了しましたが、当センターとしては、今後もKOBE足湯隊や神戸大学東北ボランティアバスと連携して活動を継続していく予定です。また、「つぶやき」の分析の活かし方についても東大被災地ネットと連絡を取りながら進めていきます。

「つぶやき」の分析を臨床心理や精神保健の専門家の方々との共同作業の中で進めていくと、足湯ボランティアは心のケアを担っているということもわかってきました。石巻のある仮設住宅では、住民の方々は暗い雰囲気があり、集会所の鍵の管理人もおらず、足湯ボランティアしかやって来なかったという状況でした。しかし、足湯ボランティアが通い続けることで、住民の方々の表情が明るくなりお化粧をしたりおしゃべりをするようになりました。その後には自主的に女性の方が集会所の鍵の管理人に立候補されました。このように足湯ボランティアが寄り添い続けることで、住民の方々が前向きに変わっていきます。いくつか足湯ボランティアのつぶやきをご紹介します。

「今日初めてきました。仮設にいるとストレスがたまるから仕事をしています。仕事で親指をケガをしてでも完治しました。本当に気持が楽になりました。（2012年9月23日・山元町・女性）」

「足湯の時は毎回来るよ。それ以外はあまり外に出ないんだ。ここに来ればみんなとおしゃべりできるけど、でも足湯の時だけだね。（2013年2月・七ヶ浜・女性）」

「ぶつけないところがないから、心がね。ほんとにありがたい。2年過ぎてやっとこうやって話せるようになった。いっぱい話してごめんね。また2~3日元気になってやるよ。（2013年3月・気仙沼・女性）」

東日本大震災を契機に大きく足湯ボランティアはすそ野を広げました。足湯ボランティアの原点は、心身ともに温まってホッとしてもらう、という気持ちです。その気持ちがあるからこそ、「つぶやき」が生まれてくるのだらうと思います。当センターでは、その原点を忘れず、一人ひとりの被災者に真摯に向き合い続けることを貫いていきたいと思っています。

（頼政 良太）



仮設住宅 屋外での足湯



避難所での足湯

南海トラフ巨大地震に向けた備えを！

南海トラフの巨大地震について、連日のようにメディアに取り上げられている。国の発表した新たな被害想定によると 32 万人もの人が亡くなる可能性があると言われているが、適切な対応をとれば死者数を最大 5 分の 1 まで減らせるという試算も出ている。さらに、この被害想定は最大規模の地震・津波を想定しているため、それよりも小規模な災害だった場合にはより被害を軽減できるだろう。

東日本大震災の経験から学んだことの一つは、津波防災で大切なのは想定を信じず率先して逃げることである。これは釜石市で群馬大学の片田教授が実践されてこられた防災教育の例を見れば明らかである。(この例は"釜石の奇跡"と呼ばれている) また、地域内で日頃から減災について考え備えておき、コミュニティの中で助け合うことも非常に大事である。

当センターでは、以前からご支援をいただいていたアユス仏教国際協力ネットワークの一つであるアユス関西と一緒に、お寺を拠点とした「寺子屋防災」を企画している。地域コミュニティの拠点となるお寺の役割は非常に重要であり、寺院の周りの住民の方々も含めた図上訓練などを考えている。

南海トラフの巨大地震に備えるには、ハードの部分に頼るだけでなく、一人ひとりがしっかりと考えて行動していける訓練が必要である。当 NGO が関わる静岡県で行われている東海地震に備えた図上訓練は 8 回目を迎えたが、この訓練の中でも、地域での日頃からの取り組みの重要性が強調されている。また、災害対策基本法が 2013 年 6 月 17 日に改正され、小さな地域単位での地域防災計画が設定できるようになった。まずは自分の身の回りや地域での取り組みから始められるように努力していきたい。

(頼政 良太)

○関連 web サイト紹介

- ・被災地 NGO 協働センター 代表村井雅清 雑感「南海トラフに想う」
<http://ngokoblog.seesaa.net/article/349292967.html>
- ・南海トラフに備えての備蓄食料について
NPO 法人プラスアーツ理事長 永田宏和さんの「ローリングストック法」
<http://www.nhk.or.jp/sonae/column/20130217.html>
<http://www.daiwalifenext.co.jp/tips/science/interview/06.html>
- ・改正災害対策基本法
http://www.bousai.go.jp/taisaku/hourei/kaisei_hourei.html

東日本大震災活動報告会のご案内 ~若者の視点から見た東日本大震災~

東日本大震災により大きな被害を受けた被災地は、2年以上が経過した現在もまだまだ復興への歩みは進んでいません。東日本大震災以来、活動を継続している被災地 NGO 協働センターと神戸大学東北ボランティアバス、不良ボランティアを集める会のメンバーによる活動報告会を開催し、若者の視点で現在の被災地の課題を捉え、今後の支援活動の在り方を考える機会としたいと思います。

【日時】 : 2013年7月27日(土) 18:00~21:00

【場所】 : 神戸市勤労会館 403 講習室

(市営地下鉄・JR・阪急・阪神・ポートライナー各三ノ宮駅から東へ徒歩5分)

【参加費】 : 500円(当日会場でお支払ください)

【定員】 : 50名(要予約・先着順) 定員になり次第締め切ります。氏名・連絡先・所属を明記の上、電話またはメールでお申し込みください。

【協力】 : 神戸大学 学生ボランティア支援室 / 不良ボランティアを集める会

【問い合わせ先】

被災地 NGO 協働センター

神戸市兵庫区中道通2 1 10

TEL:078-574-0701 / FAX:078 574 0702

E-mail:ngo@pure.ne.jp(担当/頼政)

図上訓練への参加

被災地 NGO 協働センターは県外団体として、3月2、3日に開催された第8回「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」に参加しました。今回の図上訓練の中では参加者による「場の力」というものを非常に強く感じました。

訓練内のワークショップの中で、協働センターは藤枝市と連携して東海地震で想定される課題へと取り組みました。この課題は場合によっては他の市町村と協力しなければ解決できないというものもありながらも、近隣地域の人たちと話し合うということもなく各市町村が個別に課題に取り組むと言う状況が続きました。

しかし一方で、他の県外団体の方から、「藤枝市と協力したいがなかなか切り出せない」という声が別の市町村にあることを聞きました。ならばと、藤枝市の方々に他市町村との協力を提案すると、「事前の訓練を一緒に行おう！」という意見も飛び出し、その場で他市町村との連携交渉がはじまりました。終盤には、同地域の市町村の代表が集まり、今後は協力して訓練などを行い、災害時の連携を模索していくことが決まりました。

足りない部分を他市町村に求めるだけでなく、同じ地域として共に災害へ立ち向かってゆくことを決めることができたのは、まさに市町村を越えて「場」を共有した結果なのではないでしょうか。そして次は、今回の図上訓練で得た成果を活かし、深めていく場をつくりだしていきます。

(上野 智彦)



第8回・図上訓練 会場の様子

ハザードマップ作成の要領で、
地図を用いて危険箇所を予測する
防災訓練を行っている

CODE10周年シンポジウム「寄り添いからつながりへ」

CODE 海外災害援助市民センターは1995年の阪神・淡路大震災を機に被災地 KOBE から生まれた市民の集まりです。この18年間で51回の海外の被災地への救援活動を行ってきました。NPO 法人として再スタートをして10年になります。それを記念して2013年2月2日にシンポジウムを開催しました。

基調講演では芹田代表理事によって「民主主義における最大多数の幸福は99人の幸福で、必ず最後のひとりが切り捨てられる。だから、NGOはその最後のひとりを代表しなくてはいけない」というCODEの基本理念が語られました。

また、アフガニスタン、中国四川省、ハイチの被災地からゲストをお呼びし、「支援と受援」についての議論もなされました。長い紛争の続くアフガニスタンでは「ぶどうプロジェクト」によって村に希望が見出された事、中国、四川で建設された「老年活動センター」を村人が観光の拠点として活用しようとしている事、貧困にあえぐハイチでは、これから建設する予定の「農業技術学校」が農業を担う若者を育てていく事などが語られ、それぞれの被災地で海外から受けた支援を自分たちの力に変えていく「受援力」の重要性が確認されました。そしてポスターセッションでは、次世代を担う若者の発想による災害救援プロジェクトが提案され、大人たちをうならせました。

CODEは、この10年を機にこれまでの理念をしっかりと引き継ぎ、今後も次世代の若者たちと共に被災地、被災者に寄り添い、災害を通じて人と人がつながっていく事を目指していきます。

(CODE 海外災害援助市民センター事務局長 吉椿 雅道)



第49号 2013.6.31

発行所: 被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL: 078-574-0701 FAX: 078-574-0702 <http://www.pure.ne.jp/~ngo>

阪神・淡路大震災から18年の時が流れました。まけないぞうが生まれてから16年が経ちました。この間、全国・全世界の人たちに支えられ、KOBEも復興の道を歩んでいます。あの時に、復興を急ぎ過ぎ、いまになってちょっとこれはおかしいな、もっとこうしておけばよかったなどの課題が出てきています。

そんなKOBEを見つめてきたまけないぞうたち、いまでもKOBEや海外、そして、東日本の被災者のひとり一人に寄り添っています。

東北大震災から2年3ヶ月……

東北大震災の被災地では、「いまだ復興の『ふ』の字もないよ」とほとんどの被災者はこぼしています。津波で何もかも奪われた土地は何もなく、所々に手つかずの崩壊した家などが残ったまま、以前の面影はなく、草が生い茂り静寂に包まれているようです。

いま被災地では、復興住宅やまちづくりについての話題がほとんどです。復興住宅や高台移転に向けた土地の確保は、所有者が高齢化していて、持ち主や資料がなかなかみつからなかったり、遅々として前に進まないような状態です。被災者の人たちの我慢も限界です。ある釜石の仮設にお住まいの被災者の方が「行政は、自力再建を進めるが、私たちの家はちょうど、津波が到達した地点なので、遺体もたくさんあがった。親戚も6人ほどが亡くなり、自宅の前のお店の駐車場には当時たくさんの遺体が並んだ。最近も自宅の跡地で骨のかけらがみつかった。

そんなところに帰れというけれど、帰れないんです」と涙ながらに話してくれました。「本当なら、地元から出ていく選択肢もあるけれど、孫たちが流された自宅の跡地で、「お帰り」「ただいま」とけなげに遊んでいる姿を見て地元に残ろうと思った」と、だからしんどいことがあって心が折れそうになっているなかでも踏ん張っているのです。それでも行政は先述のような、被災者の立場をかえりみず、何を持って復興事業と言えるのでしょうか？

今回政府は公共事業にたくさんのお金をつぎ込んでいますが、人の心は置き去りのまま、「人からコンクリートへ」逆戻りです。「大きな予算がついているようですが、何の実感もないです」というのが被災者のつぶやきです。

ある被災者の方は、「ぞうさん、少し休ませてもらえないかしら？」とちょっとしんどそうに話します。「いいですけど、どうしました？」と聞くと、「なんだか、もうどうしたらいいのかわからない。あの時（津波の時）逝ってしまえばよかった」と。「そんなこと言わないで」と言ったものの、むなしくその言葉が胸をこだまします。みなさん我慢の限界です。

震災から大きな心の山をいくつ越えたら、安心して暮らせる日がくるのでしょうか？きっと被災者の心の復興は一生かかるでしょう。それは、KOBEの被災地を見ていると明らかです。

それでも生きていかなければならないのです。被災地では、ボランティアも減り、関心が薄れ、被災者の方たちは孤独と不安でいっぱいです。長期化する避難生活ですが、もっとたくさんのボランティアの人たちが被災地を訪れ、少しでも被災者の方のお話を聞いてくれるだけでも、不安が取り除けることがあります。

先日大船渡の仮設にお邪魔したときに、桜の季節ということもあったのですが、お花見と称して「花より団子」で、作り手さんのみなさんと一緒にご飯を食べました。山菜やわかめなど、おいしいご飯とみなさんの楽しいおしゃべりに時間の経つのもあっという間でした。ある人は「今日は久しぶりにみんなとおしゃべりしながら、ご飯を食べたわ～。ほんと楽しかったわぁ」と、つぶやきが聞こえてきます。また別の作り手さんは、工場が再開し、「まけないぞうを卒業します」と笑顔で話してくれる人もいました。こうして、まけないぞうが次のステップまでの架け橋になって、一日にも早くみなさんが卒業できたらと、夢が膨らみます。

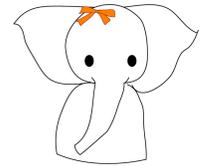
本当にみなさん楽しそうでした。何気ない食事のように思えますが、普段一人で食べている食事を大勢の人と話ながら、笑いながら食べるだけで、不安や孤独が少しでも和らいだのです。こうして、人が集まる「場」があるだけで、また明日、生きようという気持ちになるのです。ある仮設のおばあちゃんは「集会所に一日来ると、4日生きられる」と言っていたそうです。

また、現場に行けなくてもまけないぞうをご購入頂いたり、タオルを送って頂けることで、被災地の応援ができます。それが何より被災者の人たちの生きる糧になるのです。

(増島 智子)

「まけないぞう」からのお願い！！

最近、被災地へ関心が薄れていくとともにたくさんの「まけないぞう」の売れ行きも低迷しています。どうぞ、販売へのご協力をあらためてお願いいたします。タオルの提供も引き続き行っておりますので、あわせて、よろしくお祈りいたします。



～作り手さんからのメッセージ～

仮設住宅で何も考えられなく毎日ボーッとしていた頃、「まけないぞう」作りに出会い、作るたびにいろいろな顔の表情が出来上がり、気持ちも明るくなりました。これも「まけないぞう」作りに出会ったお陰だと思います。昨年九月に悩んだ末に自宅を新築し、一人暮らしなので健康で毎日が過ごせればと思っておりますが、自宅へ戻ってもパートで働いていた職場もないので、震災前の生活には気持ちがなかなか戻れませんが、今でも「まけないぞう」作りと震災前に行っていた、老人ホームのボランティアには参加させて頂いております。

(2013/05/28 千葉県旭市 女性)

震災から2年が経っても、目の前の景色はガレキがなくなっただけの何も無い景色です。それでも“まけないぞう”を作ってから約1年になり、心の安定にずいぶん助けられました。私が作ったもので喜んで頂ける便りを嬉しく思います。これからも少しずつですが、頑張って作りたいと思います

- 編集後記 -

事務所の入り口に網戸を取り付けました。GW明けからなんと12月中頃まで猛威をふるう蚊に対抗するためです。

アジアの一部地域では「蚊の痒み成分を熱で分解する」という理屈で、刺された箇所に蠟を垂らすそうです。試してみたところ、たしかに痒みはなくなり、腫れがひくのも早いようです…が、何回か火傷しました。そんなわけで今年は網戸を設置すると、嘘のように被害が減りました。



～支援者からのメッセージ～

【まけないぞうサポーター 佐野純三さんから ポルトガルの巡礼に「まけないぞう」同行のお便りです】「成田からパリ経由でリスボンに到着。これからサンティアゴの徒歩巡礼にでかけます。実際に歩くのは、コインブラからの380kmで、18日間です。前回2010年はピレネーのフランス側のバスクの村から800kmを36日かけて一人で歩きましたが、今回は、元同僚のポルトガル人の友人 José Quintaと二人で弥次喜多です。まけないぞうが2頭、リスボンの José Quintaさん夫妻のうちに引っ越し。かわいくなってもらえますよ。」

網戸を取り付ける者たち



- ご協力をお願い -

被災地 NGO 協働センターは、被災地復興支援事業を継続するために寄付金をお願いしております。各方面の有志の方々には、宜しくご協力、ご協賛を賜りたく存じます。当団体が行っている事業および進捗状況は、本誌にて紹介させて頂きましたとおりです。

本趣旨にご賛同いただけます場合は、同封の振込用紙に必要事項をご記入のうえご送金ください。